

* 犯罪捜査に協力した光電管照度計収蔵

東京天文台時代に測光部という研究部があった。たぶん初代部長さんは元台長も務められた古畑正秋先生であった。古畑先生の在職期間は昭和18年8月～昭和48年4月である。古畑先生は東大紛争の時、東大の評議員が全員責任を取って辞めたときの台長であった広瀬台長の後、台長職につかれた。次の部長さんは北村正利氏であった。この光電管照度計は多分その頃のものと思われる。この光電管照度計(写真1)の試験成績表の校正年月日を見ると54年11月29日とある。これは昭和54年であろう。今年(昭和)84年だ。30年前のものである。アーカイブの仕事をした筆者にとって30年物はさほど古くはない。この照度計は元測光部で夜光観測をしていたグループの持ち物で、主に田鍋浩義氏が使ったものだと、この3月で定年を迎えるM氏が教えてくれた。



写真1 光電管照度計

この頃、すでに光電池を使った照度計もあったが、この光電管方式はより低照度の測

定をより精密に行える特長があった。取扱説明書によると月夜の明るさまで精確に測れるとある。ここが肝心なところである。国立天文台、当時は東京天文台といったが、犯罪があったとき、現場の明るさがどのようであったかということが問題になる場合がよくある。そのために東京天文台の質問電話に日の入り、日の出の時刻、あるいは月が出ていたか、月齢がどのくらいであったかなどを警察からよく聞かれていた。裁判の時の証拠として公文書として回答しているとも聞いた事がある。この照度計もそういった質問に答えるために、実際に日の入り何分後の明るさとか、何月何日の何時の明るさとはというようなことに答えるために使われたそうである。使ったのは測光部の田鍋氏であったという。

今時の照度計は当然デジタル化されているが、これはアナログ式で張りの振れで読むようになっている。最近では安全衛生委員が研究室の照度を測りに来たりする。そう珍しいものでもなく、現在も良く使われているものだが、光電管式ということで、アーカイブスの仲間に入れよう。電池を交換すればまだ使えそうである。



写真2 アナログの針が触れる光電管照度計